

郡市 医師会より

支え、支えられ、助け、助けられ、共助の佐渡

佐渡医師会

副会長 岡 崎 実



佐渡医師会は、健康寿命を体現されている諸先輩のご活躍によって市民に評価されている。81歳を越えて尚、佐渡市休日急患センターの出務をスマートにこなされるH先生を筆頭に、同年代のS先生、ほかにも3名の内科診療所の先生方が後期高齢者でも難なく現役続行中であり、ほんの3年前に高齢者の仲間入りをした私など佐渡ではまだまだヒヨッコである。

2025年の佐渡市福祉・保健・医療の報告書では佐渡の人口は4.7万人、高齢化率は43.3%。中でも大きな塊は65歳～79歳の1.25万人で、この15年間で全人口の26.6%を占める。私も含め、この大集団が今から人生の最終段階に向かうことになる。一方、15歳未満の小児人口は4.4千人(9.4%)と大逆転しており、これからの人生で若者に頼ろうなどと甘い考えをもつ佐渡の高齢者は見あたらない。何歳であろうがお互いに支え、支えられ、助け、助けられ、先を行く方々に学びながら、人生の最後まで安心して楽しめるよう心がける覚悟である。

1. 佐渡医療の「いま」

会員の高齢化に加え、人口あたりの医師数は全国平均、県平均を下回る。病院医師は新潟大学からのローテート出張医に頼っており、診療の継続性に課題がある。さらに、佐渡看護学校が昨年度より募集停止となっており、介護離職もあって看護師数の維持も難しい。

2. 医療を守るための「連携」

2018年から活動している佐渡地域医療・介護・福祉提供体制協議会は2022年に一般社団法人となり、医師会、歯科医師会、薬剤師会、行政、介護事業所などが一堂に会し、より円滑で効率的なサ

ポート体制をめざして協働し、進化を続けている。

佐渡市立両津病院が2025年5月に新築オープンし、佐渡総合病院との連携はさらに強化された。限られた医療資源を有効に活用するため、2013年から「佐渡総合病院と病院・診療所・薬局」の医療情報をつなぐ「さどひまわりネット」が稼働していたが、さらに2025年からは「医療と介護・福祉」をつなぐ「さどヘルスケアナビ(りんくる)」が立ち上がり、島内各施設の垣根を越えた連携は、より一層強化されている。

基幹病院である佐渡総合病院(354床)が高度な治療や救急を担い、両津病院(60床)は慢性期を中心とした地域医療、そして地域の診療所がかりつけ医としての健康管理を、介護施設は生活支援を担うという全体が見渡しやすい環境となった。

救急重症例は救急隊との連携のもとで2系統のドクヘリ、海上保安庁や自衛隊、防災ヘリ等に支えられており、天候さえ許せば佐渡総合病院の屋上ヘリポートから新潟大学病院や新潟市民病院の屋上ヘリポートまで20分で到着し、直ちに治療が継続される。

3. 遠隔医療等、未来の医療

新潟大学などと連携して遠隔での画像診断、治療困難例の診療相談をしていただける仕組み作りや、島内でも診療所と病院医師をつなぐオンライン診療の普及等が進められている。

人材の流動的な厳しい医療現場であるからこそ、佐渡医師会は、関連機関と緊密に連携して島の総合的な診療能力が最適化できるよう協働している。これからも信頼関係をさらに強化し、「安心の基盤づくり」に貢献したい。